

## 2018 年 9 月 2 日（日）「主の召命にどう応ずるか」

マタイ 19:16-22

16 すると、ひとりの人がイエスのもとに来て言った。「先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか。」 17 イエスは彼に言われた。「なぜ、良いことについて、わたしに尋ねるのですか。良い方は、ひとりだけです。もし、いのちに入りたいと思うなら、戒めを守りなさい。」 18 彼は「どの戒めですか」と言った。そこで、イエスは言われた。「殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証をしてはならない。 19 父と母を敬え。あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」 20 この青年はイエスに言った。「そのようなことはみな、守っております。何がまだ欠けているのでしょうか。」 21 イエスは彼に言われた。「もし、あなたが完全になりたいなら、帰って、あなたの持ち物を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」 22 ところが、青年はこのことばを聞くと、悲しんで去って行った。この人は多くの財産を持っていたからである。

### 【序論】

今日のストーリーは、マタイ福音書に幾つか見られる召命物語の一つです。召命物語と言えば、漁師であったペテロとアンデレの召命（4:18-20）、ヤコブとヨハネの召命（4:21-22）、取税人であったマタイの召命（9:9）などが思い起こされるでしょう。これらは「応答」における成功例に数えられますが、今日の「金持ちの青年」の召命は失敗例の一つ、残念なケースに当たります。

召命とは、主イエスから一人一人に向けられた救いへの招きです<sup>1</sup>。それはこの人生において特別な迫りを受ける召命の出来事が中心にあります。召命を受けた人に求められることは、人生の向きを全く神に向け直すこと。イエス・キリストの十字架の血による贖いを受け入れ、永遠のいのちに入ること。そして、神の子としての人生を歩み始めることです。召命に応じた人には、更に日々の小さな召命が与えられていく。その日その日に、主が語りかけてくださる御言葉に答えることが求められるのです。そして、週の初めの日には、礼拝の中で御言葉を具体的に聞きます。その意味で、今私が語っております説教は、主の召命の言葉を取り次ぐ働きと位置づけられるでしょう。説教者も会衆も、共に主イエスの語られることに耳を傾けているのです。

---

<sup>1</sup> 「救い」は「永遠のいのち」「天国」「神の国」「天の御国」などと言い換え可能。

## 【本論】

### 本論 1. 永遠のいのちの誤解

すると、ひとりの人がイエスのもとに来て言った。「先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか。」(19:16)

「ひとりの人」という表現は曖昧で、これではどんな人なのかが分かりません。しかし、20 節になると、これが「青年」であったことが分かります。更に、並行記事を読むと彼が「役人」という立場を持っていたことも分かる(ルカ 18:18)。そして、彼は大変な資産家でありました(19:22)。当時、一般的なユダヤ人の考え方では、財産は神からの祝福のしるしとされておりましたから、彼はまさしく「祝福された人」として羨望の眼差しを向けられていたことでしょう。

ところが、彼の心中には未解決の問題がありました。それは、自分がまだ永遠のいのちを持っていないという感覚です。どんなに品行方正に生きてきたとしても、如何に人々から賞賛されようとも、心の奥底に不安がある。満たされない何かがある。それは善い行ないを積み重ねたとしても決して消えることのない感覚でした。

彼の感じていることは私にもよく理解できるのです。神との関係が健全でない時、自分が神から離れていると感じる時、言いようのない虚無感と、行き先の分からない不安に苛まれるものです。これは、救われる前、著しく私の人生に影を落としていました。しかし、クリスチャンになってからも、日々の召命に応じなかった時や、罪を犯した時に決まって囚われる感覚であります。

さて、彼が主イエスに問うている内容に注目しましょう。「永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか」。何という真面目な問いであるか。私たちは自分の永遠の行き先について、彼ほど真剣に考え、誰かに問うたことがあるのでしょうか。多くの人は、自分の死を意識した時に、このことを考え始めるのかも知れません。この青年が「永遠のいのち」について問うた相手、それが主イエスであったということは重要です。これ以上ふさわしい相手に問うことはできない。なぜなら、主イエスこそ永遠のいのちの源であり、それを人に与えることのできるお方だからです。

彼の質問は真剣ではありますが、重要なところがズレています。彼は多くの人が考えるように、何かを行なうことで永遠のいのちが得られると思っているのです。何らかの「良いこと」、つまり目を見張るような善行によって、それが達成できると信じていた。ユダヤ教の主たる考え方は、律法を欠けるところなく行なうことによって、救いの道が得られるというものでした。そして、彼はそのように生きてきたつもりだったのですが、

何かが足りない。心に平安がない。そもそも、人は律法を完全に守り行なうことはできないのです。自分の力で神の御前に義となることはできない。

永遠のいのちに至る道はただ一つ。イエス・キリストを信じることです。「わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません」(ヨハネ 14:6)。私たちは主イエスのこの明快な答えを期待します。ところが、主はなぜか彼の言葉尻を捕えるようなことを言われるのです。

## 本論 2. 十戒提示の意味

イエスは彼に言われた。「なぜ、良いことについて、わたしに尋ねるのですか。良い方は、ひとりだけです。もし、いのちに入りたいと思うなら、戒めを守りなさい。」(19:17)

青年が「良いこと」について問うてきたので、主イエスも「良い」という言葉にこだわって返答をなさいます。もっとも、マルコやルカでは「尊い先生」(マルコ 10:17、ルカ 18:18)と語りかけてきたのに対して、主が「尊い」という言葉を捉えたとされている。いずれにせよ、主イエスは「良いこと」のすべてを神に帰している。そして、神が与えてくださった「良い戒め」を守ることが、永遠のいのちに至る道だと言われます。

この点で読者は少々違和感を覚えるのではないのでしょうか。まるで律法を守ることによって永遠のいのちを得られると言われているような。なぜ主は「わたしを信じなさい」と単刀直入に言われなかったのか。主イエスの律法理解を注意深く読み取りましょう。元来、律法とは人が守り行なうべき道として与えられたものです。そして、本当にすべての律法に従って歩むことができるならば、人間は完全な存在であり、真の幸せを得ることができるでしょう。その意味で、もし律法に従い切ることができる人が一人でもいたなら、その人は確かに永遠のいのちを持っているはずです。しかし、人間は誰一人としてその道を歩むことはできない。律法に逆らう性質を持って生まれてきてしまうからです。そして、聖なる律法は、それを破る人間を責め立て、罪の意識を生じさせるものとなりました。

それでは、どういうことになりますか。律法は罪なののでしょうか。絶対にそんなことはありません。ただ、律法によらないでは、私は罪を知ることがなかったでしょう。律法が、「むさぼってはならない」と言わなかったら、私はむさぼりを知らなかったでしょう。しかし、罪はこの戒めによって機会を捕らえ、私のうちにあらゆるむさぼりを引き起こしました。律法がなければ、罪は死んだものです。私はかつて律法なしに生きていましたが、戒めが来たときに、罪が生き、私は死にました。それで私には、いのちに導くはずのこの戒めが、かえって死に導くものであることが、わかりました。(ローマ 7:7-10)

ですから、主イエスがここで「戒めを守りなさい」と言っておられるのは、神の基準で守れと言われていることになります。そして、この青年に律法を守り得ない自分に気づかせようとしておられる。

彼は「どの戒めですか」と言った。そこで、イエスは言われた。「殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証をしてはならない。父と母を敬え。あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」(19:18-19)

この青年は「どの戒めですか」と問い返します。「そんなことは分かっています」というかすかな苛立ちを感じさせる言葉です。そこで、主イエスは十戒の六戒から九戒までを取り上げ、最後にレビ 19:18 を加えます。ここで引用されている十戒の内容は、前半の「神との関係における戒め」は省かれており、「人との関係における戒め」に限定されています。それは、人との関係における自分のあり方というのは、現実的に自分の目に見えやすいからです。守れているか、そうでないかが客観的に分かる。

### 本論 3. 青年はどうすべきであったか

この青年はイエスに言った。「そのようなことはみな、守っております。何がまだ欠けているのでしょうか。」(19:20)

この青年に欠けていたこと、それは自分が律法を守り得ない存在であるという自己認識でした。彼は確かに品行方正に生きてきて、表向きは殺人を犯したことがなく、姦淫も犯してはおらず、盗んでもおらず、偽証をしてもおらず、両親を大切にしてきた。しかし、神がこれらの戒めに置いておられる基準は、彼が思っているよりもはるかに高いものでした。山上の説教を振り返りましょう。

- ・ 昔の人々に、『人を殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。(5:21-22a)
- ・ 『姦淫してはならない』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。(5:27-28)
- ・ さらにまた、昔の人々に、『偽りの誓いを立ててはならない。あなたの誓ったことを主に果たせ』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。決して誓ってはいけません。(5:33-34a)

これらが今日の箇所では取り上げられたすべての戒めを網羅しているわけではありませんが、主イエスが要求される義の基準は、その戒めを表面上守っていればよいようなもの

のでないことは一目瞭然です。偽証の問題一つを取りましても、真実を知っていながら黙しっていることもまた、神の前では偽証となるのです。姦淫を実際には行なわないにしても、私たちの目は卑猥なニュースや様々な誘惑に向きやすいことを自覚しているでしょう。つまり、この青年は自分が如何に神の義の基準から遠い存在であることを悟らなくてはならなかったのです。そして、主イエスはついに彼にとって決定的なポイントを突かれます。

**イエスは彼に言われた。「もし、あなたが完全になりたいなら、帰って、あなたの持ち物を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになりまし。そのうえで、わたしについて来なさい。」(19:21)**

主イエスはこの青年のウィークポイントを見抜いておられた。それは、彼が富に執着していたということです。そして、富こそが彼と神との関係を阻んでいる元凶であった。ここで主は一切を売り払って我に従えとお命じになります。この言葉はよく誤解されて読まれてきました。主イエスに従う人は誰でも大切なものを捨てなくてはならないと読む人が多いのです。しかしながら、主がここでこの青年に言われたことが誰にでもそのまま適用できるものでないことは、それぞれのキリスト者の献身の方法が違うことを見れば明らかです。主がこの究極の要求をなさったのは、彼に自分の内的問題に気づかせるためです。富を捨てなければ入信できないということではありません。彼が如何に富を愛しているかに気づかせることにより、それを貧しい人々に与えていない罪に目を開かせようとされた。「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」という戒めは、彼にとっては富を与えることだったのです。そして、それができないのであれば、その点で彼は戒めを破っていたのです。

**ところが、青年はこのことばを聞くと、悲しんで去って行った。この人は多くの財産を持っていたからである。(19:22)**

残念な結末となりました。彼は主の召命に応えることができなかったのです。主イエスが意図したこととかけ離れた結果になったと言ってもよいでしょう。主が求めておられたことは、彼が去っていくことではありません。そうではなく、富への執着を認め、律法を守れない自分に気づき、そんな救いようのない自分を主イエスに差し出すことだったのです。そして、主イエスに従っていくときに、どうにもならない富への執着から解かれていくことができたはずなのです。それは、主イエスの持つ富が、地上の富をはるかに凌ぐものであることを知るようになるからです。

## 【結論】

今日は、召命に応えることに失敗した一人の人のストーリーを学びました。私たちが究極的に求めているものは、この青年と同じです。永遠のいのちです。しかし、このいのちには自分の力では到達できないこと、主イエスに属することなしには得られないものであることを改めて教えられます。そして、自分のうちにはこの世のものに対する強い執着心があることも認めなくてはなりません。このような者をどうか主が憐れんでくださいますように。そして、主に結びついていくときに、地上のものから解放され、全き自由な人生を歩むことができるようになることを願います。

### 【祈り】

慈しみ深い天の父なる神様。あなたは誰一人として滅びることを願ってはおられません。そして、一人一人の人生に何らかの形でご自身に振り向かせようとアプローチをしておられます。それに気づく人も多くはありません。そして、人間は心に何らか、あなたとの関係を阻むものを持っています。それが何であることを教えてください、主イエスによって聖められ、まっすぐあなたに心に向けることができるよう、お助けください。今日も召命の御言葉が私たちに語られました。その言葉を拒むことがありませんように。この一週間も日々あなたにお従いすることができるよう、導いてください。

### 【祝祷】

仰ぎ願わくは、  
聖なる律法をもって、人が幸せに生きる道を示し給う、父なる神の愛。  
生まれながら律法に逆らう性質を持つ我らに、信仰による救済の道を拓き給うた、主イエス・キリストの恵み。  
神との関係を阻む心の障害に気づかせ、日々語られる召命に応答せしめ給う、聖霊の親しき交わりが、  
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。